

おかめのはなし

土佐の國名越の長者權右衛門の娘おかめは、その夫八右衛門を非常に好いてゐた。女は二十二、八右衛門は二十五であつた。餘り夫を愛するるので、世間の人は嫉妬の深い女だらうと思つた。しかし男は嫉妬されるやうな原因を作つた事もなかつた。それで二人の間にはいやな言葉一つ交された事もなかつた。

不幸にしておかめは病身であつた。結婚後二年にもならないうちに當時土佐に流行してゐた病氣にかかつて、どんな良醫も匙を投げるやうになつた。この病氣にかかる人は、喰べる事も飲む事もできない、ただ疲れてうとうとして、變な夢に惱まされて居るだけであつた。おかめは不斷の看護を受けながら、毎日常第に弱つて行つて、たうとう自分でも助からぬ事が分つて來た。

そこで彼女は夫を呼んで云つた、

『私のこのいやな病氣中あなたがどんなに親切にして下さつたか口では云へません。こんなによくして下さる方はどこにだつてありません。私、あなたに別れるのが本當につらい。……考へて下さい、私未だ二十五にもなりません。——その上私の夫ほどよい人はこの世にはありません、——それでも私は死んで行かねばならない。……いゝえ、駄目、駄目、氣休めをおつしやつても

駄目ですよ、どんなお医者だつてどうにもならないのですもの。もう二三ヶ月生きてゐたいと思ひましたが、今朝鏡を見たら、今日のうちに死んで行かねばならぬ事が分りました、——さう、丁度今日です。それであなたにお願がありますの——私が安心して死んで行けるやうに思つて下さるやうなら、——その願を私にかなへさせて下さい。』

『一寸云つて御覽、何だか』八右衛門は答へた、『私の力でできる事なら、どんな事でも喜んで上げて』

『それが——あなたのちつとも喜ばない事なんです』彼女は答へた、『未だ若いのですもの、こんな事をお願することは、中々——大變——むづかしい事ですわ、でもその願事は私の胸に燃えてる火のやうです。死ぬ前に云はせて下さい。どうぞ。……ね——あなた、私が死んだら早晚、皆であなたに奥様を持たせるでせう、ね、あの、約束して下さいませんこと、もう二度と結婚はしないと、——おいやですか……』

『何だ、そんな事か』八右衛門は叫んだ。『願事と云ふのはそれだけの事なのか、それは何でもなし。よし、約束した、お前の代りは決して貰はない』

『あゝ、嬉しい』おかめは床から半分起きて叫んだ。

それからうしろへ倒れた、同時に彼女の息は絶えた。

おかめが死んでから、八右衛門の健康は衰へて来るやうであつた。初めはその様子の變りやう

を、人々は人情の悲しみの故と解釋してゐた、それで村人達は『どんなにあの奥様が氣に入つてゐたのだらうな』とばかり噂してゐた。しかし月が重なるにつれて、段々蒼白くなり弱くなりして、遂には人間ではなく幽霊ではないかと思はれる程瘦せやつれて來た。それで人々はそんなに若い人がかう急に衰へるのは悲しみだけでは説明ができないと疑ひ出した。醫者達の説では、右衛門の病氣は普通のものではない、様子は何とも解し難いが、何か心の異常のなやみから起つて居るらしいと云ふ事であつた。兩親は色々尋ねて見たが駄目であつた。——彼の云ふ處では、兩親の知つて居る以外には、何等悲歎の原因はないとの事であつた。兩親は再婚をすすめた。しかし死人に對する約束はどうしても破る事はできないと云ひ張つた。

それからあと、八右衛門はやはり日増しに衰へた、家族の人々はその生命を危んだ。ところが或日の事、かねて何か心に隠してゐる事を信じてゐた母が、熱心にその衰弱の理由を云つてくれるやうに烈しく泣いて頼んだ、母の懇願には勝たれなくなつた。

『こんな事はあなたにも又どなたにも全く云ひにくい事です、すつかり申上げて見た處で本當にはできません。實はおかめはあの世で成佛ができませんのです、それからいくら佛事を行つてやりましても駄目のやうです。私も一緒にその冥土の旅に出てやらないとどうしても成佛ができません。おかめは毎晩歸つて來て、私のわきにねます。葬式の日から毎晩、來ない晩はありません。それで時々本當に死んだのではあるまいと思ふ事があります、様子や行ひは生きてゐた

時と全く同じですから、——ただ私に話をする時、小さい聲で物を云ふだけです。それから、いつでも、自分の來る事を誰にも云はないやうにと申します。私にも死んで貰ひたいのでせう。私も自分だけなら生きてゐたくはありません。しかし、全く仰せの通り私のからだは兩親のもので、兩親に先づ第一に孝行しなければなりません。それで、本當の事を皆申し上げるのです。……はい、每晚丁度限りかけると參ります、それから明方までゐます。鐘が聞えると出て行きます』

八右衛門の母がこれを聞いてびつくりした、直ちに檀那寺へ急いで寺僧に息子の告白の一切を話して助力を乞うた。高齡で、經驗の積んだ寺僧はその話を聞いて驚く色もなく、彼女に云つた。『かう云ふ事は時々あるものです、始めてではありません、それで御子息も助けて上げられると思ひます。しかし今大層危い處です。愚僧の見る處では、お顔に死相が現れてゐます、おかめさんがもう一度歸つて來れば、もうそれきりです。それで即刻やるべき事をやらねばなりません。御子息に黙つてゐて下さい、大急ぎで雙方の親戚を集めて、寺へ來るやうに云つて下さい。御子息のためにおかめさんの墓を開けねばなりません。』

そこで、親戚はお寺に集つた、墓を開く事を一同承諾したので、僧は一同を墓地へ案内した。そこで、その指圖に随つておかめの墓石はわきへやられ、墓は開かれ、棺は上げられた。棺の蓋が取られた時、居合はした人は膽を寒くした。それはおかめは病氣の前と同じく綺麗に、顔に微笑を浮べて一同の前に坐つて、——彼女には何等死のあととはなかつたから。しかし、僧は棺の中

から、死人を取り出す事を人々に命じた時、驚きは恐怖となつた、それは長い間^{原註}正坐の形を取つてゐたにも拘らず、その死體は觸はると生きて居るやうに暖かく、しなやかであつたから。それを葬場へ運んで、僧は筆を取つて額と胸と手足に何か聖い功德のある梵字を書いた。それからその屍をもとの場所へ葬る前に、おかめのために施餓鬼を行つた。

彼女は再び夫の處へ來なかつた、八右衛門は次第に健康と力を回復した。しかし彼はいつまでもその約束を守つたかどうか、それは日本の作者は書いてゐない。

原註 日本では死體は普通殆んど正方形の棺の中に正坐の形に置かれる。

(田部隆次譯)

The Story of O-kame (Kotio.)